新板

浅草土産（あさくさみやげ）

一九作

豊国画

摸古図

隣春画

上

13
2378
176

遠 13
2378
1761

紫菜淺草

土産 初編上巻

春馬改 十返舍一九作

国貞改 一陽齋豊國画

天保十六巳年
春新刻
文會堂上櫻

これ延宝年間のさうしにみえたるたんぢの九ヶ条のうち第六なり
絵の未紫にそれぞれ意をとける条に図いつもりのうちにまことあり去去記したる古風にしていとをかし今作れる絵さうしは一時の戯れなるから
おのづから勸善懲悪のこゝろこもれるによりこれがまた写にしてこゝに載せ

ひらけし硯にむかひて兼好ぬしはこ
世中をおもひ考ふるに桑田碧海の昔語はまだらく置その碧海に
生ひし淺草海苔も今は品川大森の産とかたりてこゝには渦巻の鮨に
往古を忍び桑田の繭に似たる米饅頭も廢れて金龍山の淺草餅に
伴を殘せりされバいにしへの武藏野の薄

紫菜

里人八文字屋のほとり
春馬改
十返舎一九

の草村なりしも人家たちならびて掘兼井
乃掘さへなりしも水道よ不自由なく彼の
枕のおそろしげなるも今ハ旅籠屋の木枕
ふ心まかすいぬるなど實よ今は大都会よ
生れあひたる幸なりかされや戯作の趣
向も年々歳々花相似たるにつけて歳々
年々人同じからざる趣をいはんとすれど
己が才の短きからふ只吾住なれたる所
の名産なる紫菜浅草土産と名
づけて聊古今の江戸草ぞうしも雷門の手
遊なる飛だりはねたり変ったり天地第
一番の戯場看官その氣ぐちと
御退屈でも一齣御覧ゆかしと
直じめらくいふものハ浅草の

下総肥田
柏唫社
野上宿
花子

吉田少將
惟房卿

惟房卿
北方
楓の方

吉田三男
松若丸

土浮河
鵜三太

三上山
勢田橋ハ
いづれの世
にかけ初
ゆる未詳
大日本史に
天武天皇太友
皇子の戰に
諸將進至
瀬田帝悉

衆陣橋西
撤板拒之云
大橋
長九十七間
幅七間
小橋
長九十七間
幅四間
中鴻の間
十五間
合長百
九十六間
志賀栗
本の境
に跨る
吉田
少將
惟房
卿
奥州へ
下向の
圖

二

つぎはおもいことだのとくきでいわりても
るきがごとくゆてろもくふるまをふる
まひらうみかえゆきものんうでもち
あいおうそうせのうらうせいとゆのくうへ
ゆもおてまがでもおをとをさうるう
ゆのたるとおきそうるいこぞうそて
つひゆいあるさんのをさんとそゆや
とえんたろくし山たくうきろの
たんうとむひやまうぬこの
こーそろたうとまそうろうで
このえ子のこゆそんぐるう
たとえいくでくねぐんぐこそ
けせこでんつぐみてう
ちんのちふおつんーかくふまぢう
ゆそつうあねえゆーとこそそれ
ありひんべれどるるひうるい
るべでよの
あやのるっ
ひでよべるうり
あれんそるへ
せ油ぐきふ
ふりうけ
ぐえのさ
やうぶきむを
ひー

左の口
みこそそ
ゆきさそう淡子
長ふそろのあう
まくてうううくる
ありくごもるれ
りときさにのひてあ
うちてそうくうふまう
おあせけるか、しかとふ
子ずあしろ抜子いうべ
ねりのあるふおう
てまろうぐもいひと
えそ子ずちろうるあ
時をえさしとと
わくえことふありん
いうふーてもかの
ヲの口

中ノ口
よるふそう
らそんもべも
ぐるとうく
むをろうめそ
ようくうえひ
うえひうぶ
おとぐ

せのまろー
そおぎふ
うさとかせ
ぬひでそだろて
こらせてまうん
をかまー
あまうさべ、
こうふうる
ぞぬくじれ
いろうるこよう
るまやうんそい
をあぐふとき
こそうるを
アそ
ろん

ろうねとさのうけのあや

くりぬれふーのもうとあーりかくきをろうとひうろうとれ化子い油でとひきこうめ、ろくさるうあところうふうろんかくるやんとうあふきそてやをこうろうーきねきとちんさんへ月のろとをーゆろうぬこいそのとこうかくこそなれとふとおねうちけーてうさるのひそおことうがとべのりそるーいうそ
ます

れんそてんこさくのけろうもこおやぐーてあんりあおこそるぐきあてんがさいろうくろんろくのおりかつとおあそれいろろゆもるく、うろるふるんよーやさろのへぐろこもそろのそるいうろろ

江戸咄 まこと田川のコトコトときてよび みこぞりてせぐくものせさむさ
ま〳〵渡し舟さりとそいとのりてとりあへ
ず綾の燈をかゝげ川をわたるとて
きもをけすくらり

御用

○かゝるくらまのあるさまをたゝやものゝひゞきてかなうえんをきゝざるのつきこゝはまた主従ならう

陰整難

松こゞり

浅草南馬道 松屋山城大掾製

ふるゆきのうつりきふるもしもなりとあゝ

これらのみちのくのたゝらふそさまのりうんさぎうとアゝこゝろ名佐自性いきうのうこれめんこくの吉相貌まろもこゝろぐんへありそらぐんへ

日そくのたゝらふそさまのりうんさぎうとアゝこゝろ名佐自性いきうのうこれめんこくの吉相貌まろもこゝろぐんへありそらぐんへ

とへあくしてのと白う

七ツ

のうへおれてあそぶと

つぐさくらのひんでうもれはをかきるでてそうつふけとおねふでひのくまのうおそれ女子にてろせだてくこづいとつことにてもたのめぬめのとおりよりさきとろりもふびんそりとのこまもしてあとべをアクろり「小文次ろんだべそれ子どもろひのごこのまゆくへもちてそこふけうそを

左ハ

くさまそう　たびよりくなびのうれみーとさをてこいふまも

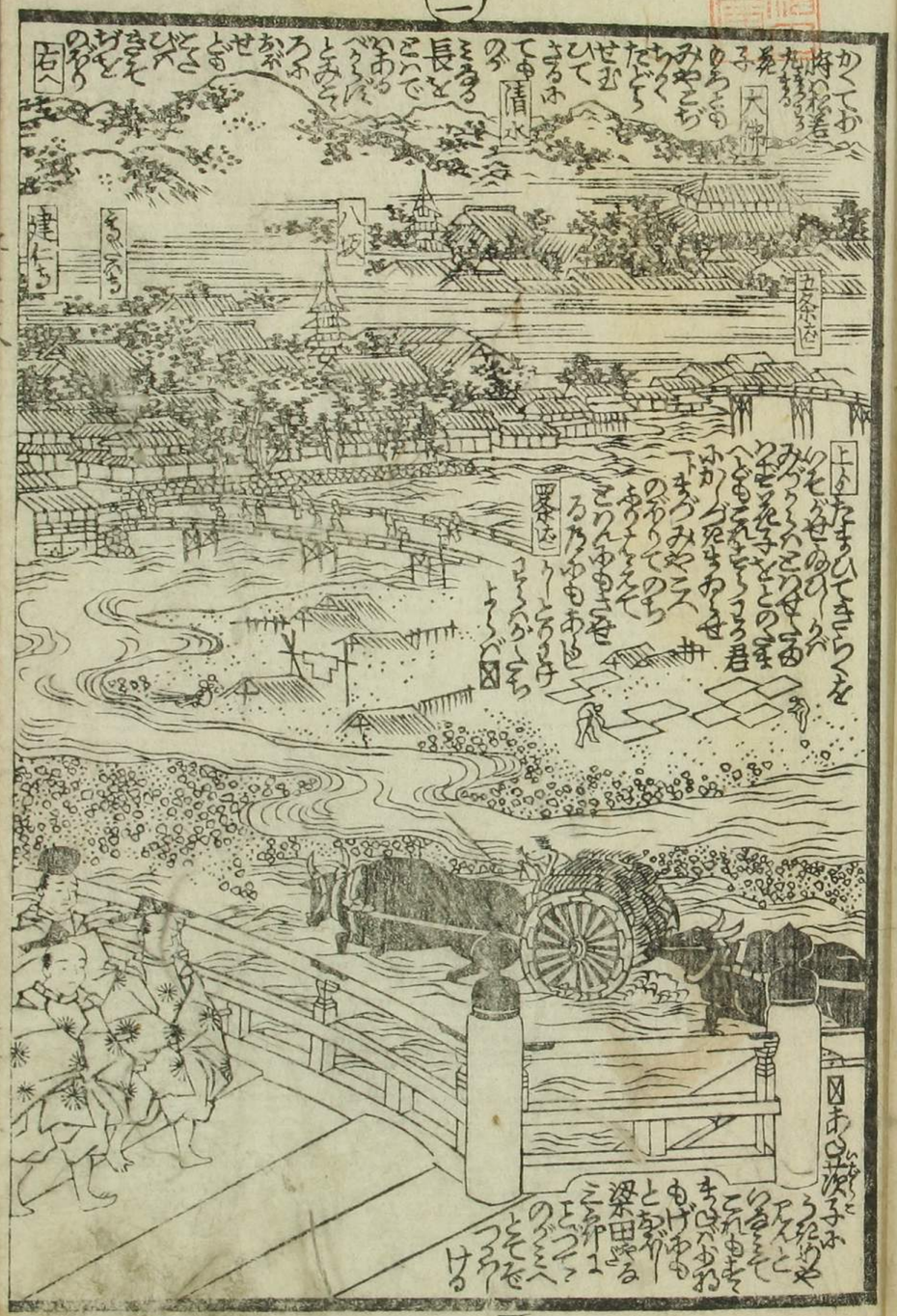
かとかるそま山人のをのえもらんだろりはるきまゆめおねふもんおなりーまもしあをれのくろうまもしをくてのくろのまもくおらんへわろるー下おつみちのくがもきひもんとあをふをまかいをもさくろりつきまゆくとのあもしぬさるかとおおふぶ波ふおところをさせみちのくへまるすをつまそくろズーとろふれのことつくろうふこさまあのあて日ふあとよろみやごりのふふつきたまひてみちのくふををさあたまうとらりしてたろくをかろうーだんうんをろうまのでこあれとくこれまえべくれれをこちらおもさろりたしのようろりまろくくふもさろりまるとまろ凡あをへんぐさのうちろぎこうやからろつく小山田とおとぐふもるさくとだろりふめぐふとれみよとぐらくんりるかて

まつ下とろろふふぶんふかこここそのさせたまへとふりそれが花子ひろくかぶりをふりこそいかけるれとあせるるぐうのぐえかくうろがあのあやけんのつるぎふせあつろのくまこのやぐりーとれまうそうろふこそのくとよりのあやまうそうろふこそのあてふをそれようろくせあてよそゆまふろうふ右ハ

◆つぐり刃ぐゆそうろうまうこそろふつきければんともふぐたまうひ田ぶるこ弁幼忠ぶをるさすの君にのつきくんとーてぐうろんふみみさせてまひつれくのそりふ申あんとまをたまひーよろふいろうろ月ごりて月ゆのそこそやまもくとをのこさんぐうもりーくけれぐかれのろろうびあてたんるうのつろざこをちよのたゆーふ右ハ

一陽齋豊國画
十返舍一九作

淡菜みせけ
下
一九作
豊国画
山田板
摸古号
隣春画


三
右へ
清水
大佛
八坂
建仁寺
五条橋
上ら
四条橋

狂伊きくてむさしの国と志もいふさの国との中にいと
大なる河ありそれをすみたる川といふ
拾穂抄に大なる河とかけるむかりろし無河をわたりて
いとく故々ハ書くなるべしと思ふる意なりといへるハいとよし
下畧 已上伊勢物語新釈巻之一
国貞改
豊国画
春馬改
一九作
これをむさしと
志も清ふされ
書間はしの国より
文會堂梓
清華
みやけ
下巻
頭痛
神効水
一九弘

近

長
花

房

梅

房

道祖神女神

山中峠は白川の里より二里半東中て山城と近江の堺なり也ながら此楊と詠じ侍り山峯つゞきん

さく波や志賀のみやまのあれまつと むかしながらの山桜かな

志賀花白
西海旗丹
假此英貌
爲紙上觀

都名所圖會云北白川は銀閣寺の南なり里の名なれ共川は民家の中を西へ流る是も名所なり白川の其一なり

後拾遺
東語乃人にこそ花は白ふと
関もりかくや花は白ふと

民部々長家

素性法師が君が代までは名にそあり

つぎ

左の句

それとうたはし白川の
流れの傍にあり 日上 藩要

楓の方

作者

後の春に出べき
圖をこゝにおもひ
るい楓の方に其に
宗貞朝臣の
をとるひとまゝ
こゝあ且ハ繪
割の

下ゝ図

上ゝ図

吉田将監宗貞朝臣

つぎをもてもの
のそこほのぐら
はるふくれのゆ
ゆんぞれなりろ
てかこのひを
させこもんと
ひけれがも
おかの長な
ひっとうと
ぐつおひる
あきのあ
ろとまふ
そうまし
これとれ
みちのく
より 右八

右の方人 若木ざくら
若みどりれをそへて
一ときわうつのうえ
うぐいす

○かくて
初松若木
梅若
建仁二
年十月の
うまれゆ
松若
四歳
さそ

中の回

作者曰
ちの
きる
ろうこれ
名とたへ
のちの
さまと
アせる
ろうこ
三人の
そうが
が終ん
れさえ
とかろ
ばお年
とアさ
まみる

右の方 ふぐきの
えかな
つぐれ
てくろ
らくころ
ゆ入り
くるゆて
ゆのめの
きそうんやさそろ
たらえと
おりくて
いとたふとば
るる
ろうり
長ながのづえ
かくらんゆうこれは
ゆーくろりのの
ありまーこよう
こゆうくいかくる
かせのたよりを
ゆうへきそゆう
それまでのこの

まる

ゆふとさまあ
ねこうえ丸を
次男えうて
一ぶ竹姫ひめ
とそうもてそ
ゆぐさをもさもひ
北のうくらの
あ中らいも
むつみかえ
らせさま
つぐえ

長いあちくうひ
なまられば
かいさえそれ
それわいやを
まくー

右の下人

紫菜淺草土産 毎編四冊 春馬改 十返舍一九作
初編二編 国貞改 一陽齋豊國画

貧福欲換得 全四冊 右同作 右同画

無漏早咲西行櫻 前編六冊 右同作 右同画

下戸質氣勸善飯 初編 右同作 一冊 玉蘭齋貞秀画

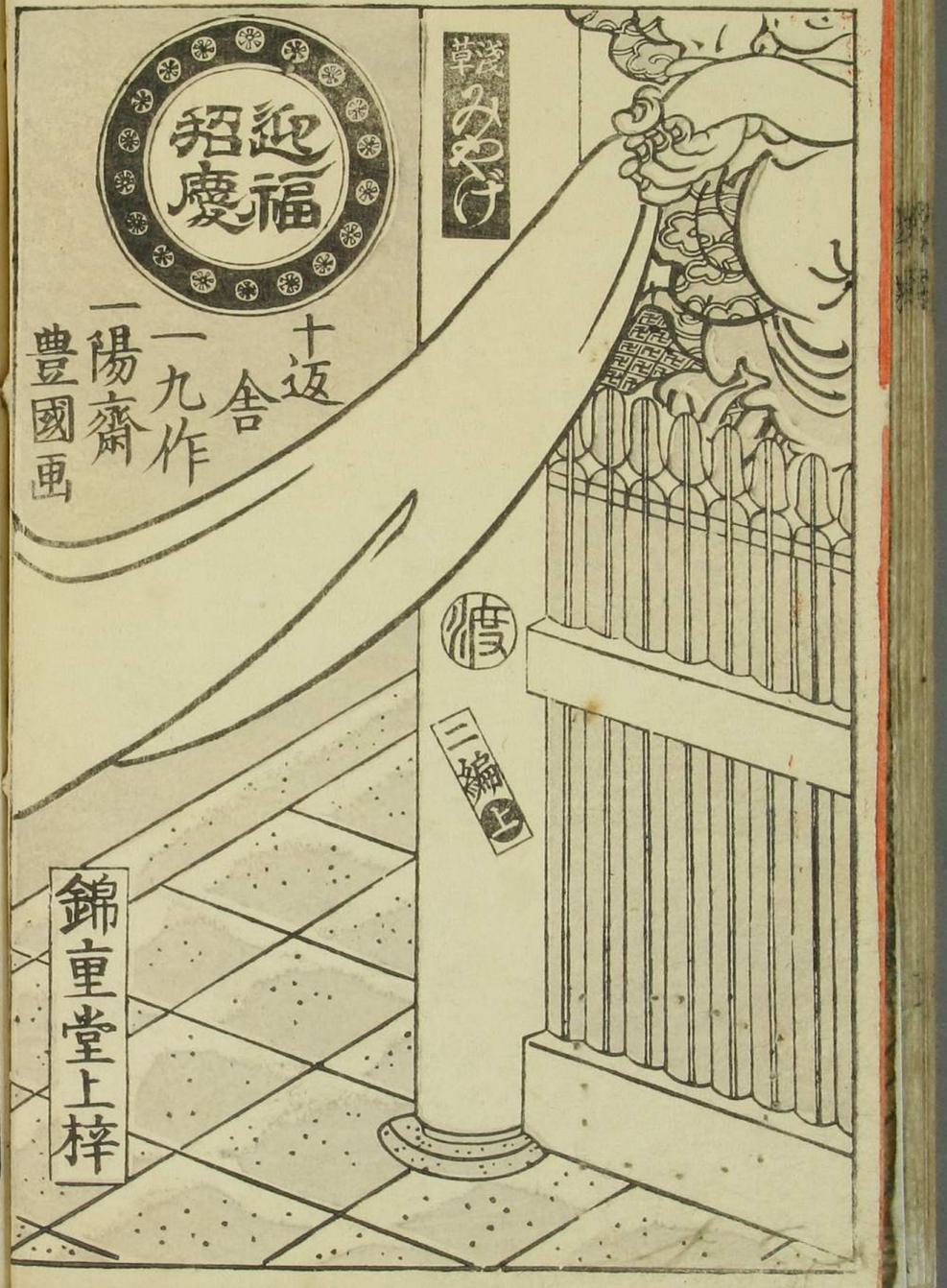
奥羽一覧 十返舍一九作 道中膝栗毛 初編 二編 三編 三冊

菊慈童 十返舍家製

江戸 文會堂 両國吉川町 山田屋佐助

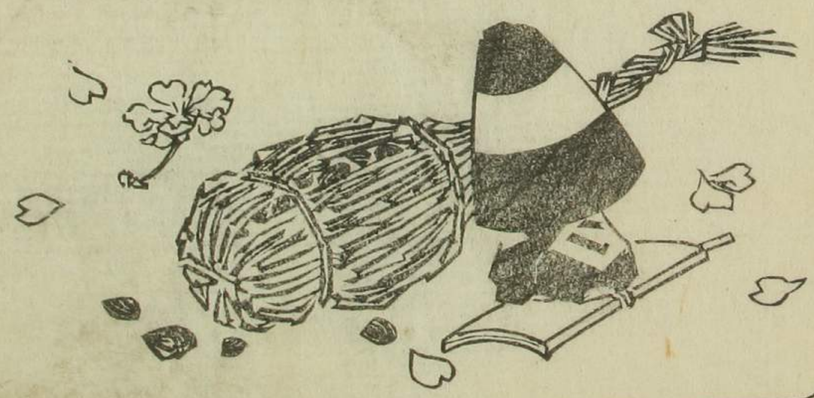
遠
2378
176 2

遠
2378
1762


浅草みやげ
迎福招慶
十返舍一九作
一陽齋豊國画
渡
三編上
錦重堂上梓

五日風靜にして戯場看人に砂をあびせだ。
十日雨おどやかにしてきぬぐの曉傘を破らぬ。
されば八日の仁王韓信に胯をくぐらする毛唐人の粉
をなし。裏門の隨身大三津の湯豆腐をしてやり
ぬふうとうんゆるも悉皆梅若の柳なびかぬ木草も
なれ鏡池のくもらぬ御代の御蔭にして猫もあふき。
飯釜も尊ふ。おきん。権助もよろこばぞといふ支は。
されば今年金重堂にこの浅草の土産をおくりて葛
飾早稲の新板と。実いりよれば書肆の耳無と
かくめでたいくと延喜いたふて問屋の氣をひきたろ
るは作者のおほちゆくといふものなるべし。

弘化三年丙午の春 十返舍一九述

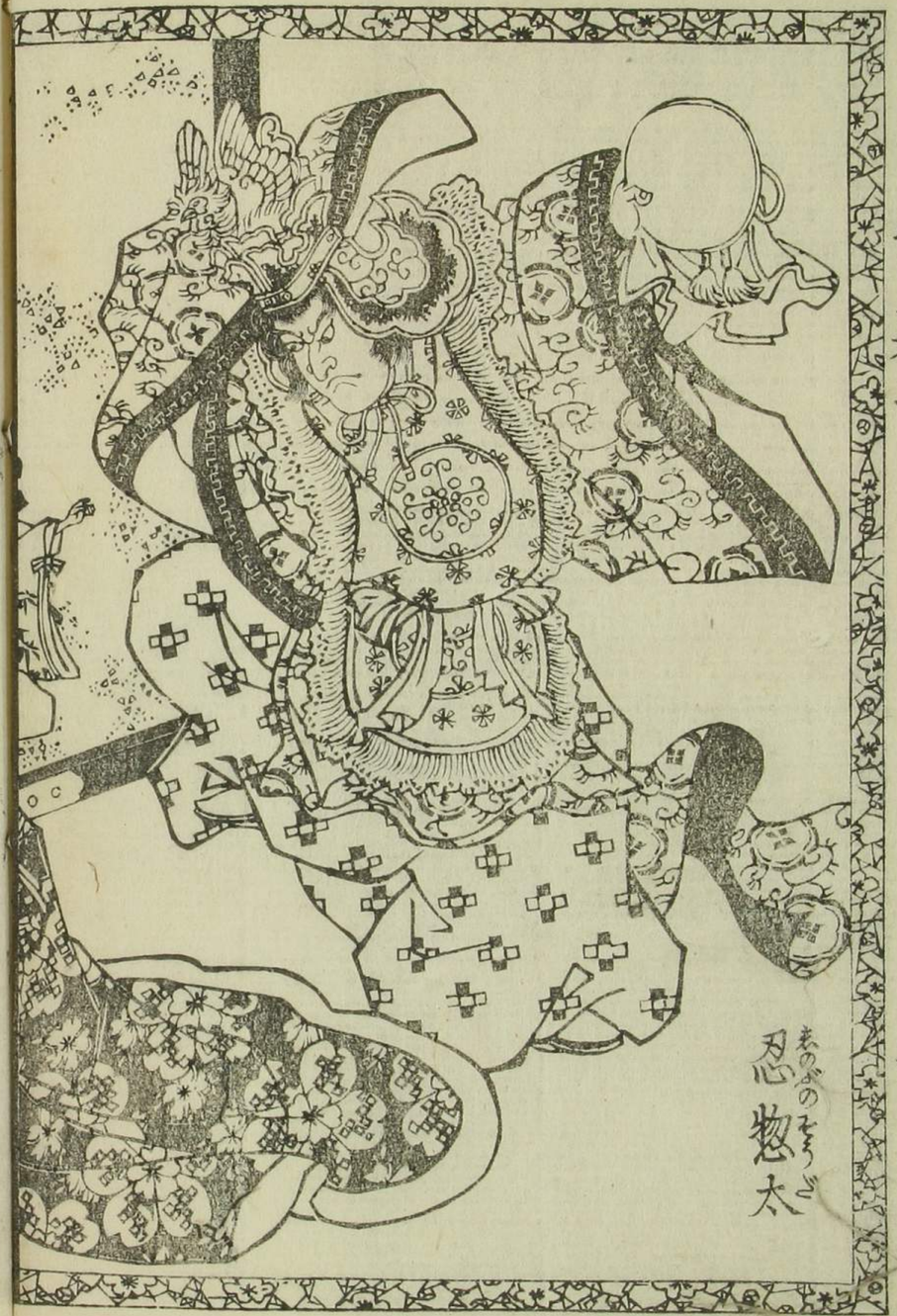


吉田少将惟房卿

宝槌樓捷女
盛之助

吉田息女
吳竹姫

茨局


忍惣太

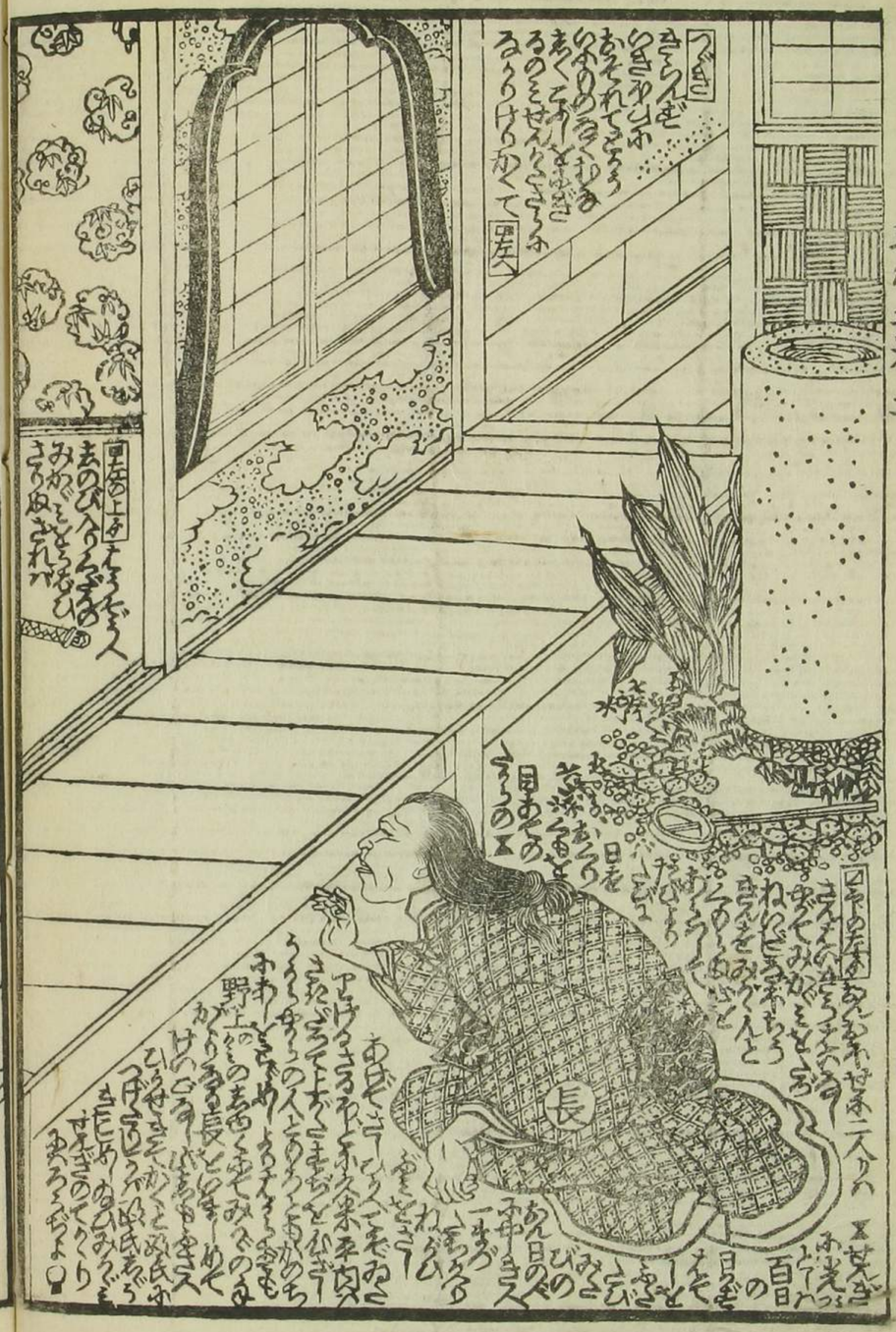
玉楼挺女
濃紫
花子局
梅若丸

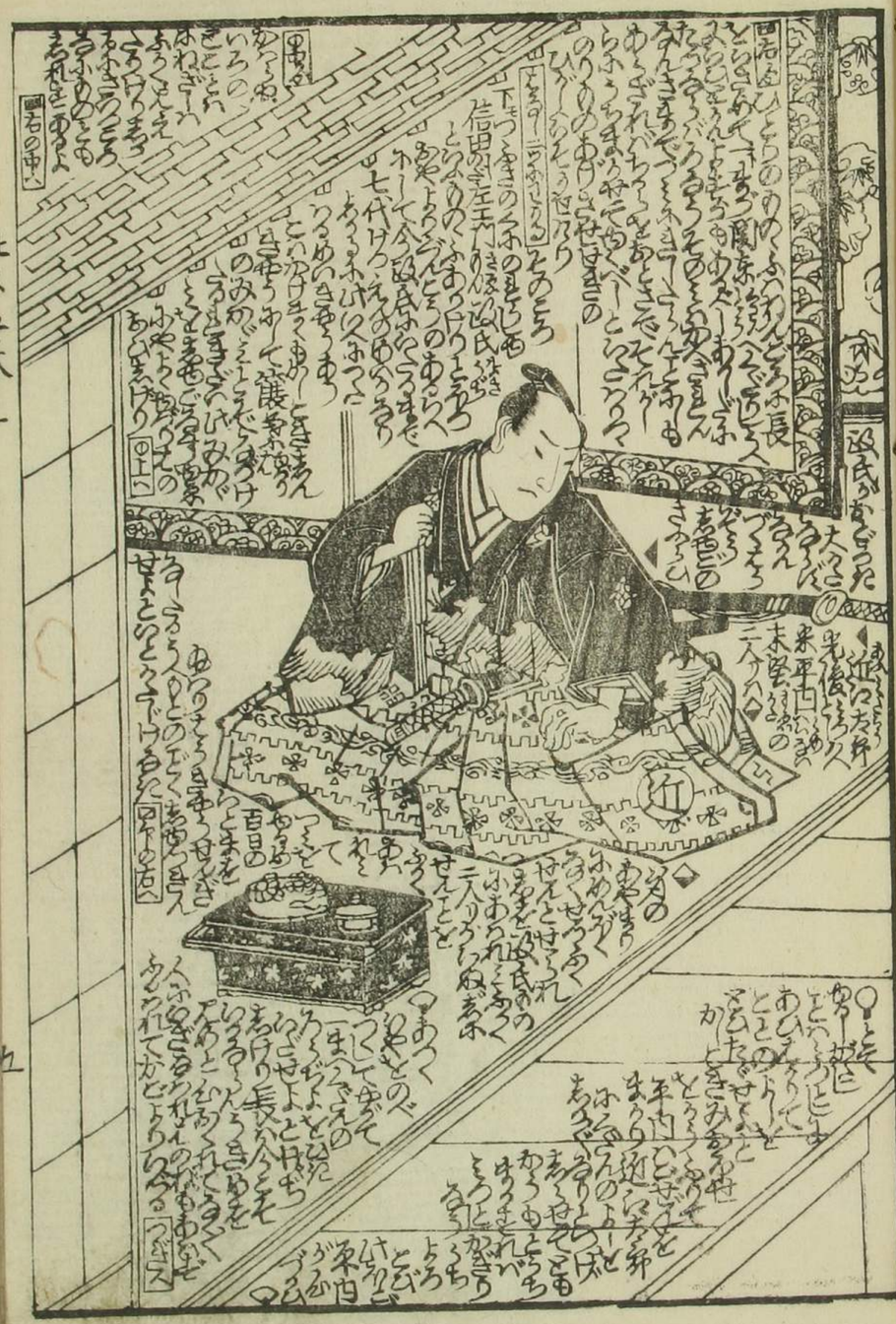
初んのぐ三物語 さうぞくふ長ものうめふ
うちこゑをそうるさらそんくもなくとや
せまりかくやせちとむやこひあこさ
てあくまのつるよりとにおくりの
ゆくえをきこまをいかり
そてみきくとけいもさられぬまほうそ
うふきうれてうらくるものりのとかき
あげんとまろみどふ長いまをとあひめ
のうこのくち今いろかふとうこえさらく
たうにおいとるうんかろうえさらく
あくされどこのくちもこてろわのふ
ようのえんべりてうこうなうとをとと
せうれねちなこてねりせんん
ますらくこもやくふきられあさまふ
てその時あこそもまあうな
おくのくてんようやかふ
さあくねふいう
のこふひとことうら
あくとえうるさ
けふれのくまる
ふもの人一人り
のの
とそをおうらんとやをも
うえふれのとあうくとのようとそれ
ようすうのこれをうえ
ほうとうおうぐけて せひくるるぐと
あ ぬぐのやこ丹二そもちもちてごろ
まるまうぐてこうのうもろうこまも
るくなりてぐさまのごまのいのち
とこうりあ ゆもおくぎめくふそく
せのくえうあうのけんかるのう
ちのきうこあびぬされど
こうくほこもるくこのよ
をこうれんあのみあれがさよ
のくぐくりかりやくまふともつ
ぐふいとふへうくねとたぶよこ
おてるこいそでふむとうをも
たきのあらいところうをこそ
うごとをこうらわむをくのの
とうのありてきくを
まきうふうるる
ぐせ長へ今
さうせんほくぐ
のう丹二本右の下人

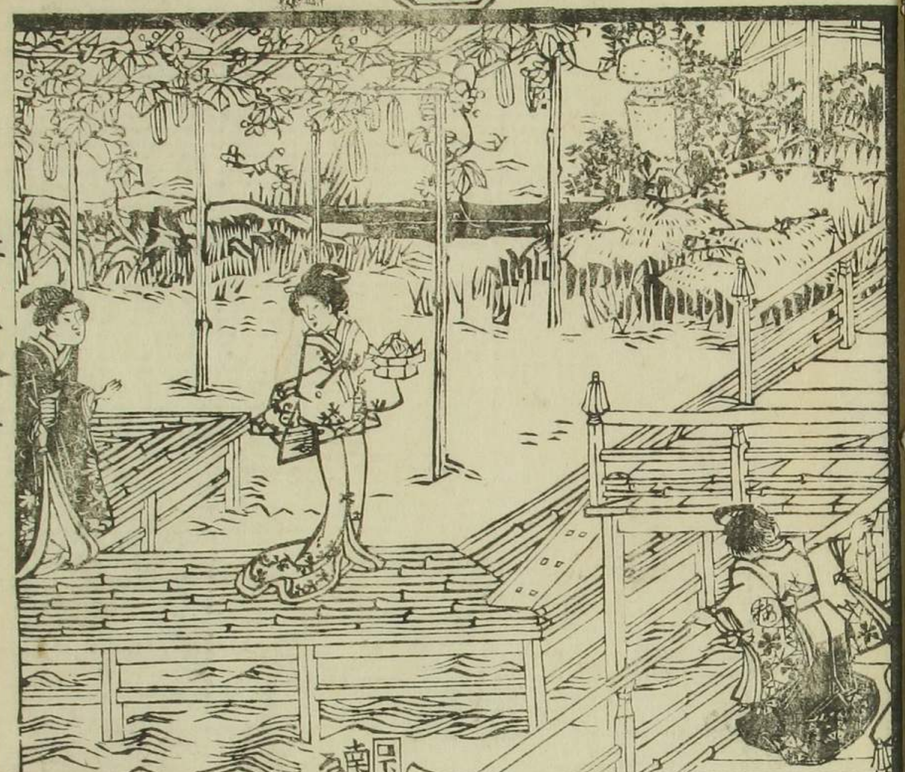
（平）

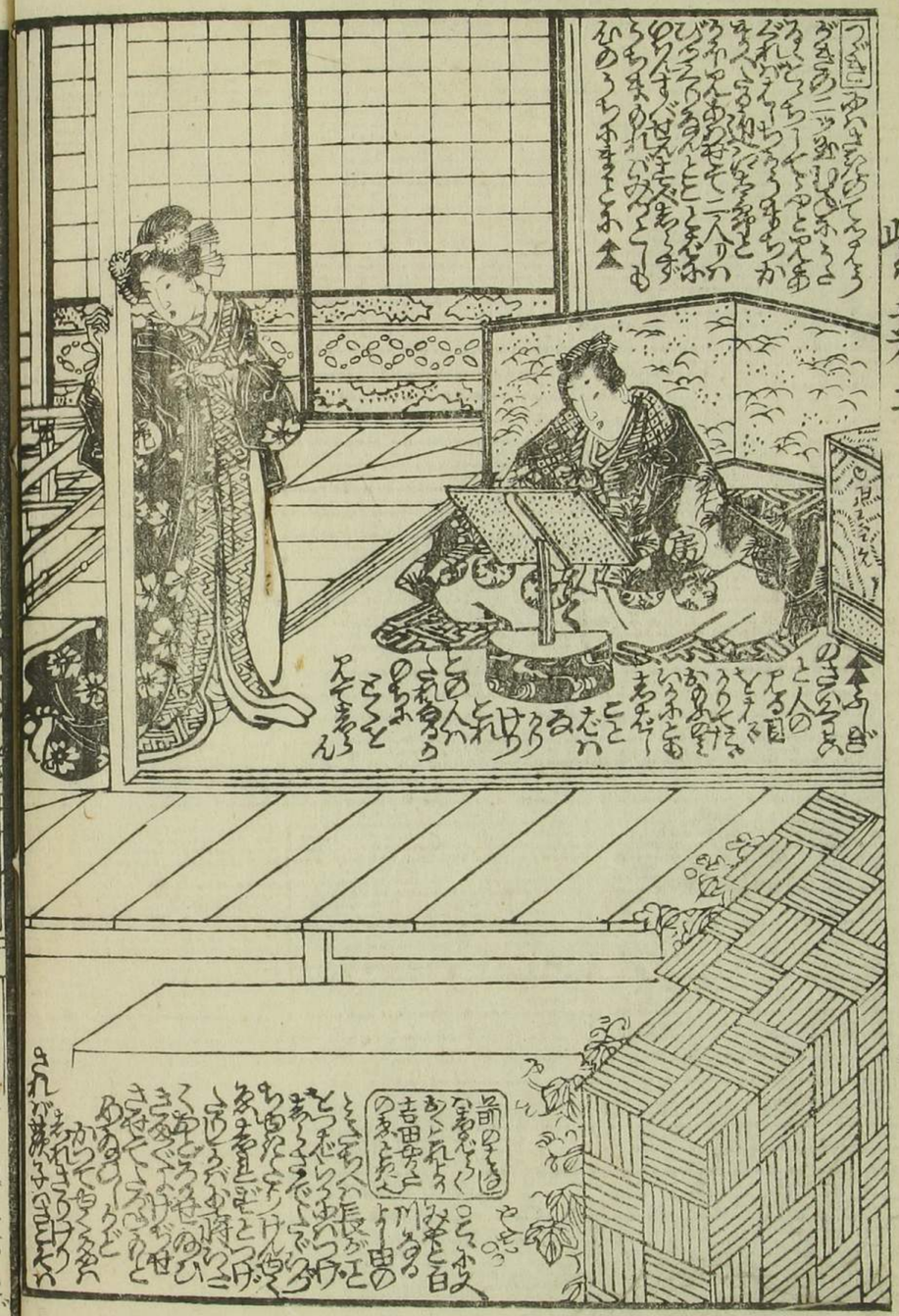
（丹）

二


長

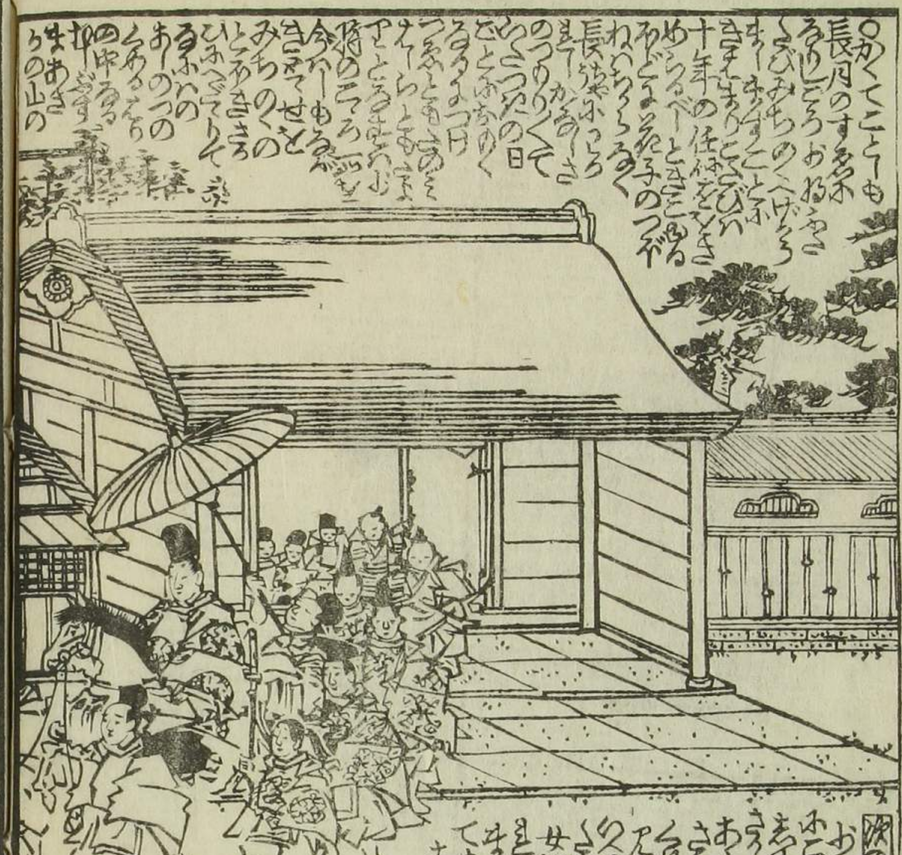

近





山の井のくまそも人のまるありうるさきあくまでもべをおれわよりおきてんぐさとかこちぐさ西のそとるかやのれのふるきあられとのよかけりされどお猪もこれらのようへありしきをあそのあぐらどばえごのふるまいとらこまれいてさぐれいもさえあてかるこそのこと仕ふくへとそくるし妙

あよきいふねなどのくまうばかりでの方もふとせーしてよくこそとさくもまりこれての一日をさ日のことぐさきいのつこもあるでことおこそをち君あいつもなろアもあつさまりけをきのうえてさよとてあのろのまうけんどあまりまそりろうんんだがひうけば宗貞母をうう男をおこてて風まろよひのまぐをあつさもえまのびてくさらよべきことのおれがまろりこへとーはおれがかんでのう方もくろえてつきぐのぬひをあくまりするーまふおまろじふこどやらんとうぐひけりそのとき宗貞こえんとこそめこそびこれ房こちのくへくりーん天ぬ男字ふ貞らふ時をまうせさまんるるそふとよそふのうけてけんかくてあくへのよふほいをとぐるときおうべきてまぐるくまごさんよりたーはりひよびこ二人りのつろをせろがいさねんよまべりんびのおるるーぐうふつぎさとそあるにそせいあまるまもくこいやをくるまトあ男いらふまりひさふところへかんでのう方あつこところをもち君あこのとう日あるをむくてとうすれでころろせろれやまのびけん

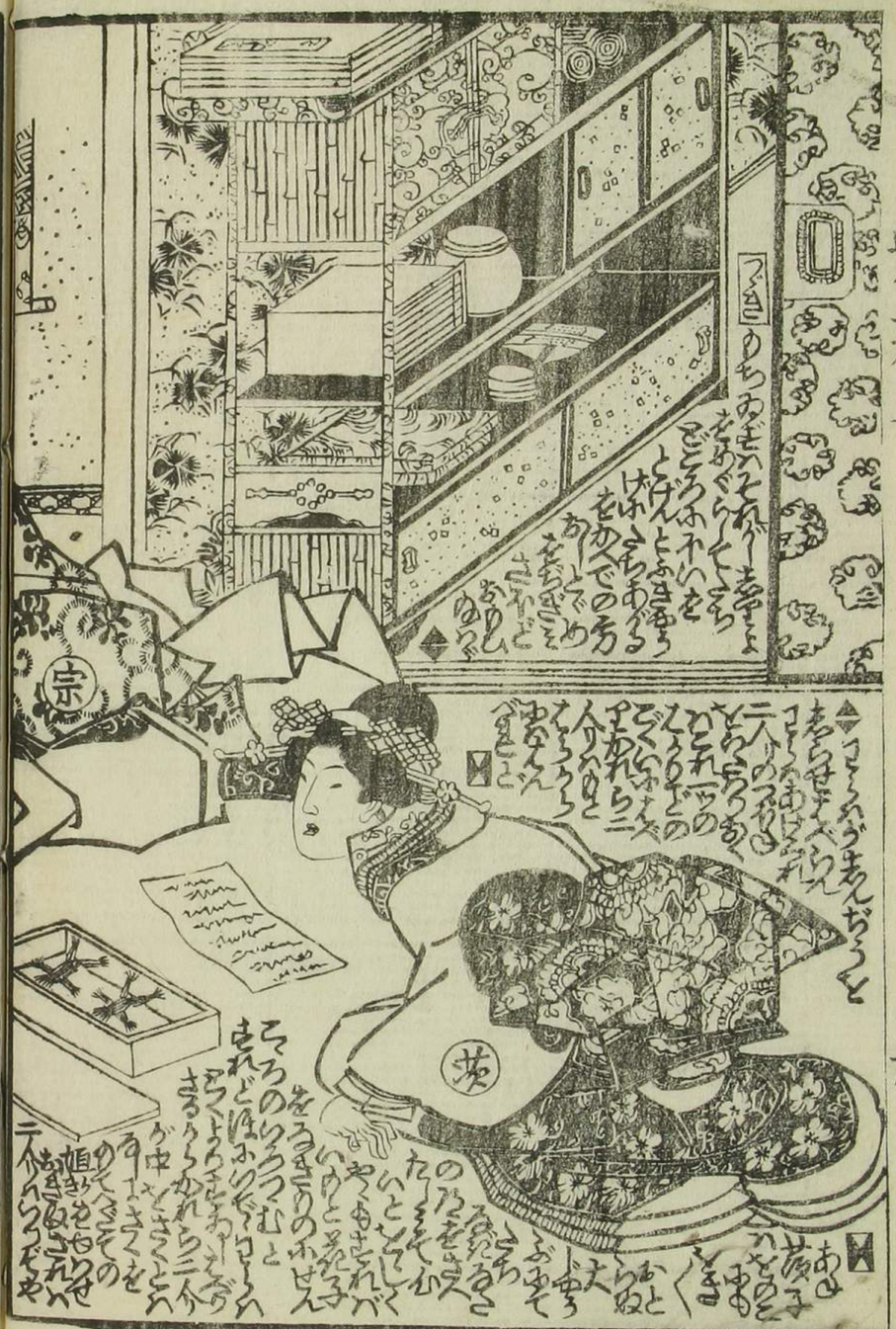


○効くてことも長月のすゑふるころおねるさくびみちのくへげろきーみすこととふおろくさまちろまこれ十年の任ふをとさめろべーとさこるれいろろくまそのつぎ長楽ふろまーかるーさのつりくてめこつの日とこおおのくろろまつ日つふとともあそなーらともよとこるまかふ将ろこころ一ヨ今かーもるぶきさてせとみちのくのひとあさきろこふへでりそふるふのあつのくあるちものけそもむーそろて

ふんのかり水まろくまくつれ山せんすねのりのふりうみのくまよろートふりさうこあめふるのあろさもうちちろこそひとうかのるるりーもふ君将ふけ宗貞部和ふんとろもみこれとの

南の局
宗

北白川の流水
宗貞
楓



つゞき

楓

繪本篠塚一代記 二編 万亭應賀作 勇齋國芳画
武藝立身館雙六 初編 万亭應賀作 一陽齋豊國画
改正御江戸大繪圖 いろは組鳶附 両面一枚摺
詞花百人一首 小本一冊 端唄手踊 獨稽古 應賀作 貞房画
落咄甲子袋 初編中本一冊 万亭應賀作 橘蝶樓貞房画
茶番獨案文 万亭應賀作 橘蝶樓貞房画
日蓮記旭衣 初編二編 万亭應賀作 一陽齋豊國画
追々出板

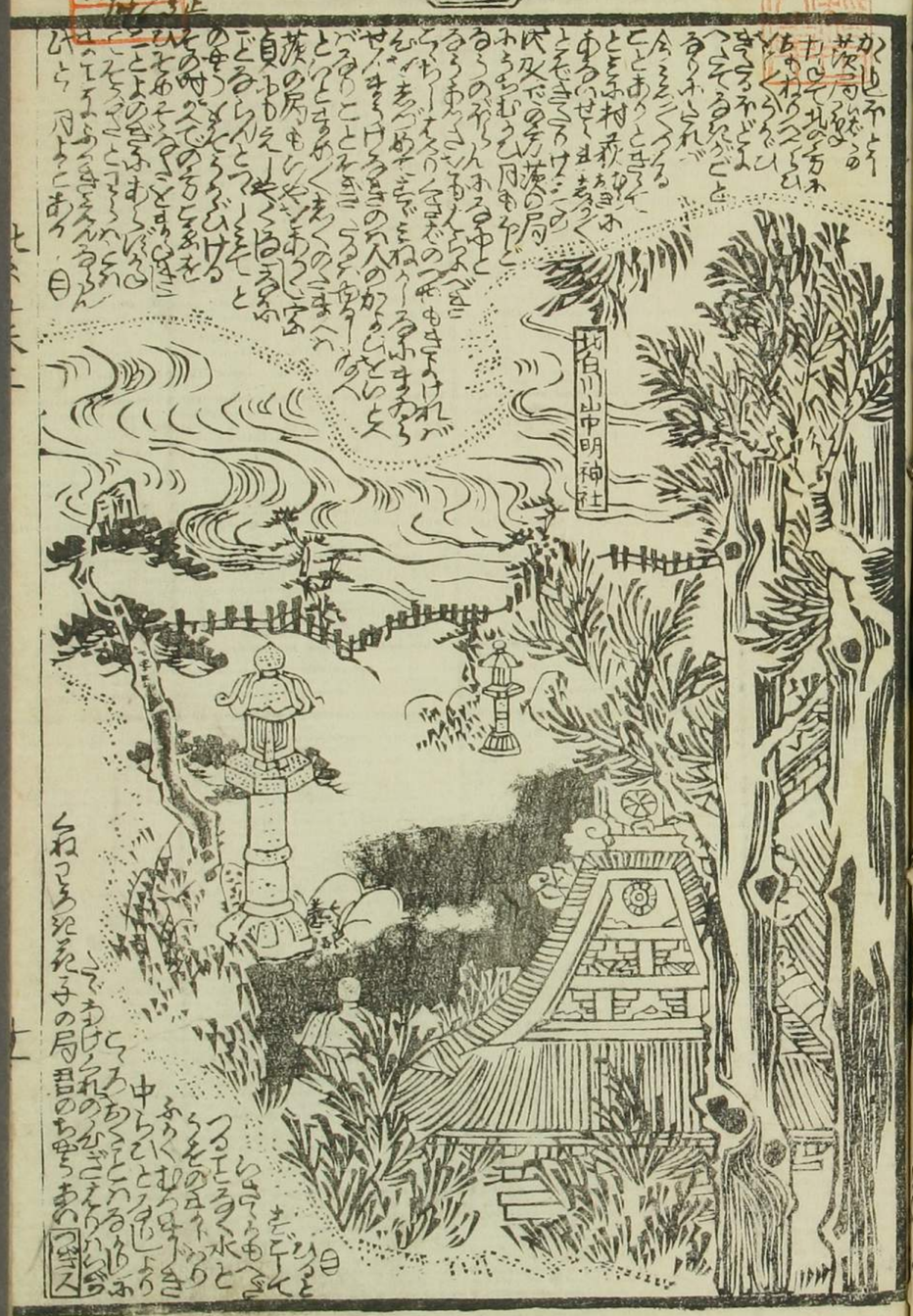
一九作

豊國画

淺草土産 下

遠
2378
176 3

遠
2378



つくも　ふくるゝとうれいろそうるゆくてのふをるさのこいらめもさらるりつくらくとこゝろふくよあるまつるぎとこゝだらそてむものつろ
ひそろるまぐのさひをりつくろんさればらぐちそのつげこうみそてふるそやあけんあるそ
どくられとこけてのんちまうあいねさむあてのあらぐされと呉竹なれもねえもあるよんひるき
目ひろのおこるべこまひそてうらぐてよのあやのるくこであるるれかみるさもこ
てえくりりめまろうかくもとろ呉竹いられかさ今のん

▲春の七分これ北白川の山中風林の右あるしものひ仏のおうけふうぐめありしまるまたのでよりそへのつめてほらめてこと

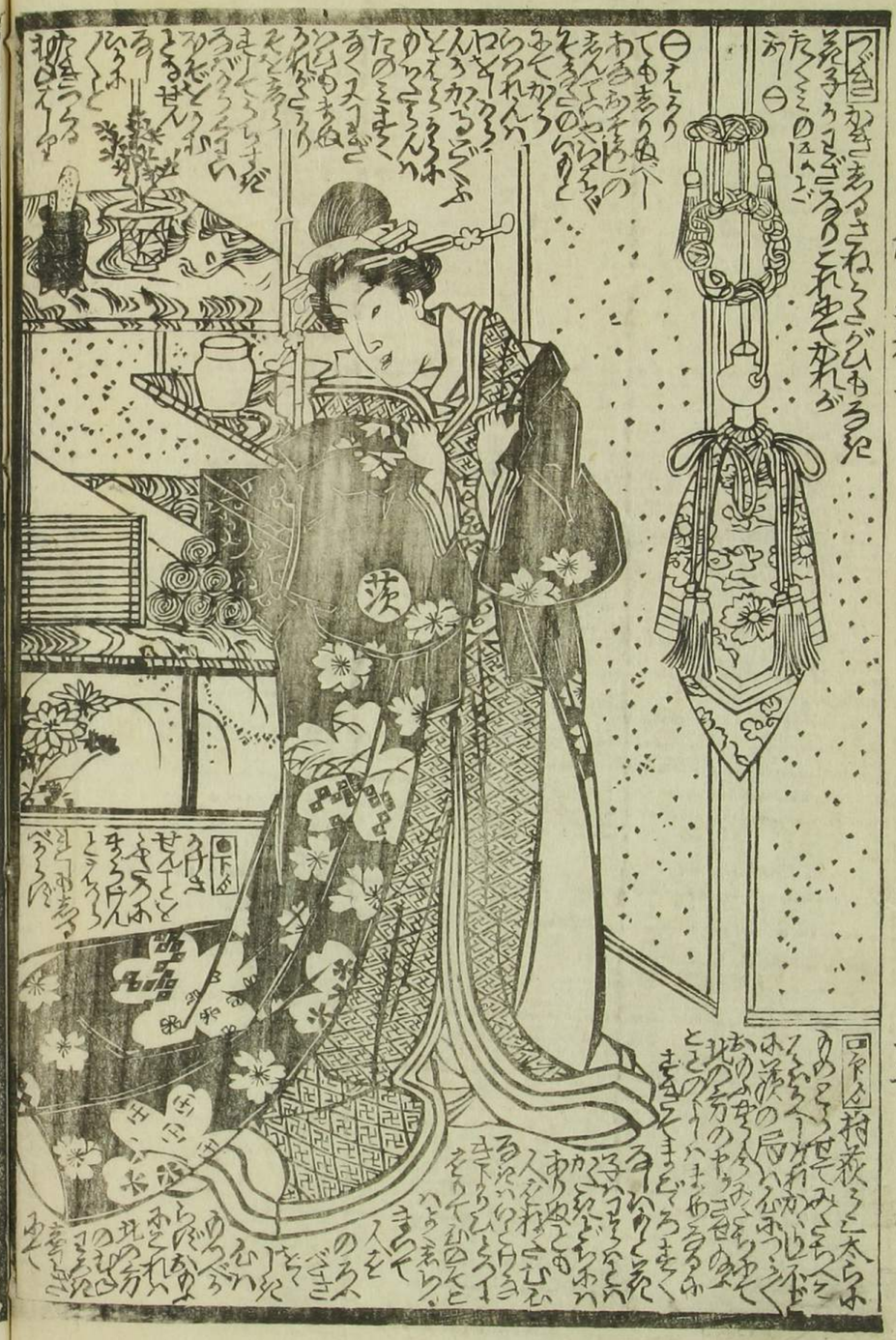
風

そら雲てゆめあぐえんかるくいつひくまんぐるまかの山中くまうおくのまそるがえれたせのひ一幸のおけひとれふるうそうめこれとうるさきのあこのの

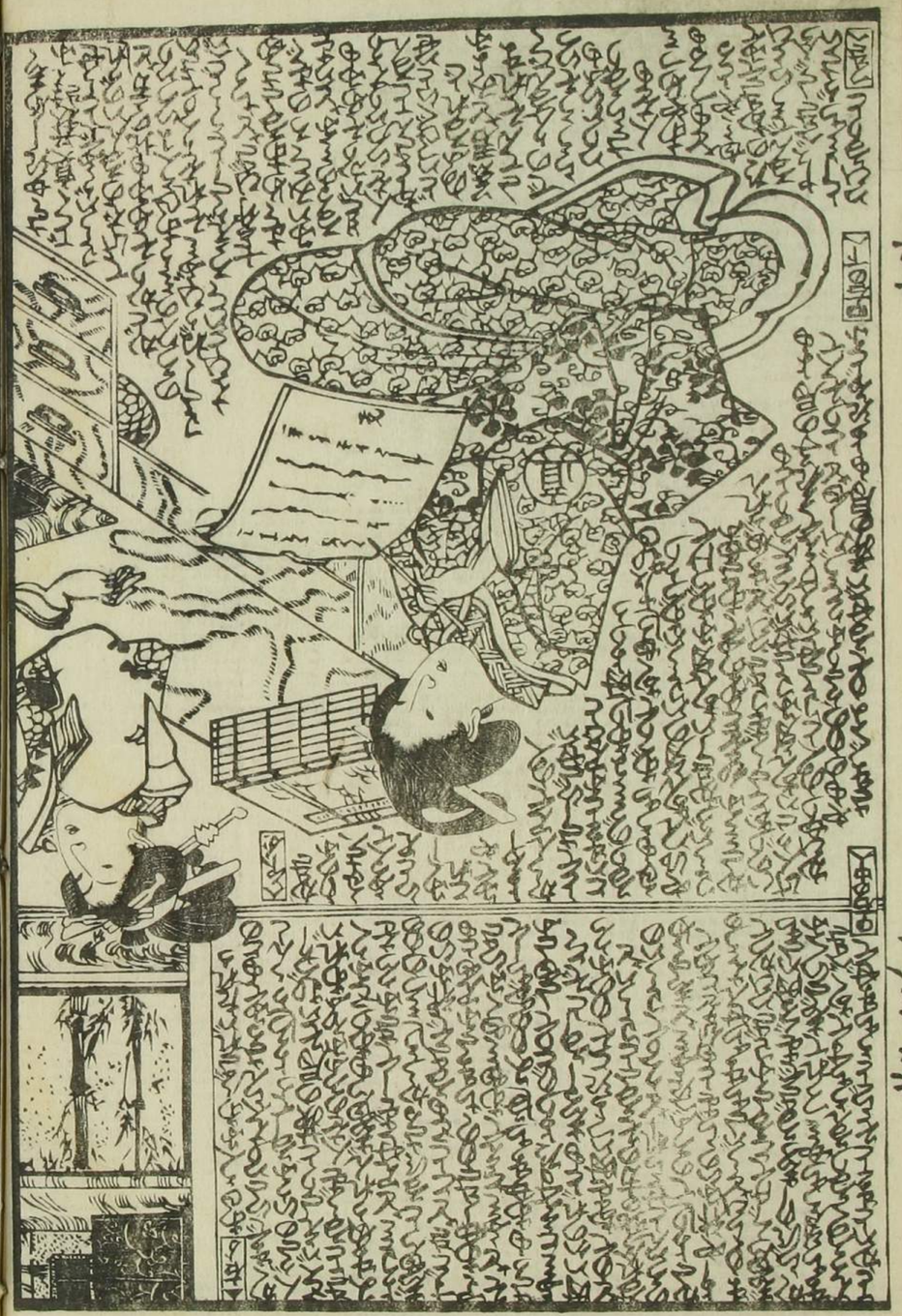
北窓雑話 二

若をよ
つれふさそこれそうかびひ君もまそくあるのりてくまひくふこうのくまひくえけごろの板若のこそ君とおのりたうのあるくらられそれのつのそそ子ぐうまう風よ見ちふるくのくの人のそくひでおくよそくのこふらうまも北のくちのくめけそれふこりそをれどるまうれとふるるうとのつのれぐひのひごくうちもあとまぬと

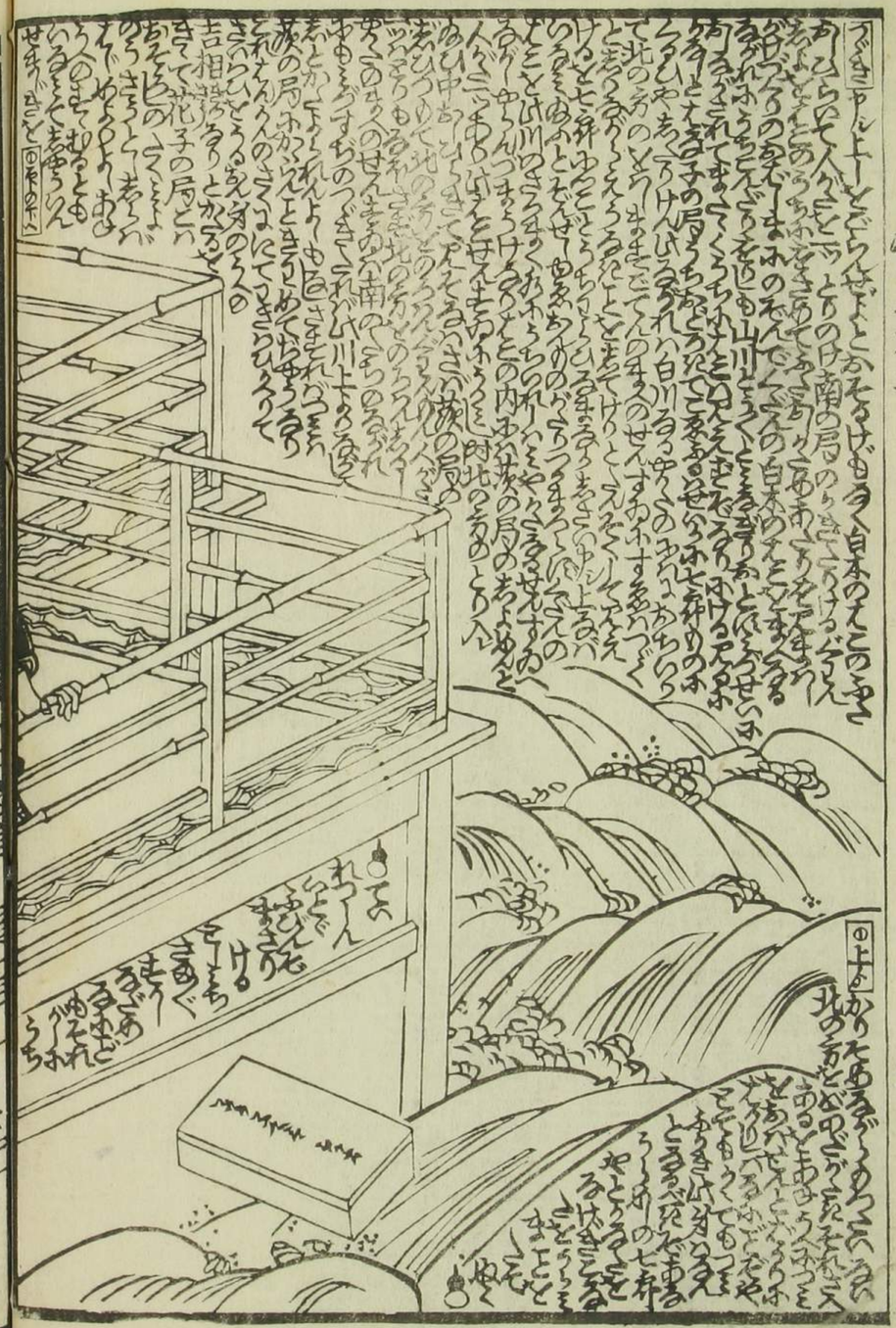
▲まつるこれそうそくひれが日ろうもちよくとろそつくまそ猪矢をまあひかつくのとをりせけとのそこれよくぐのニふそくるふとのもてくまうこそまるとこそ

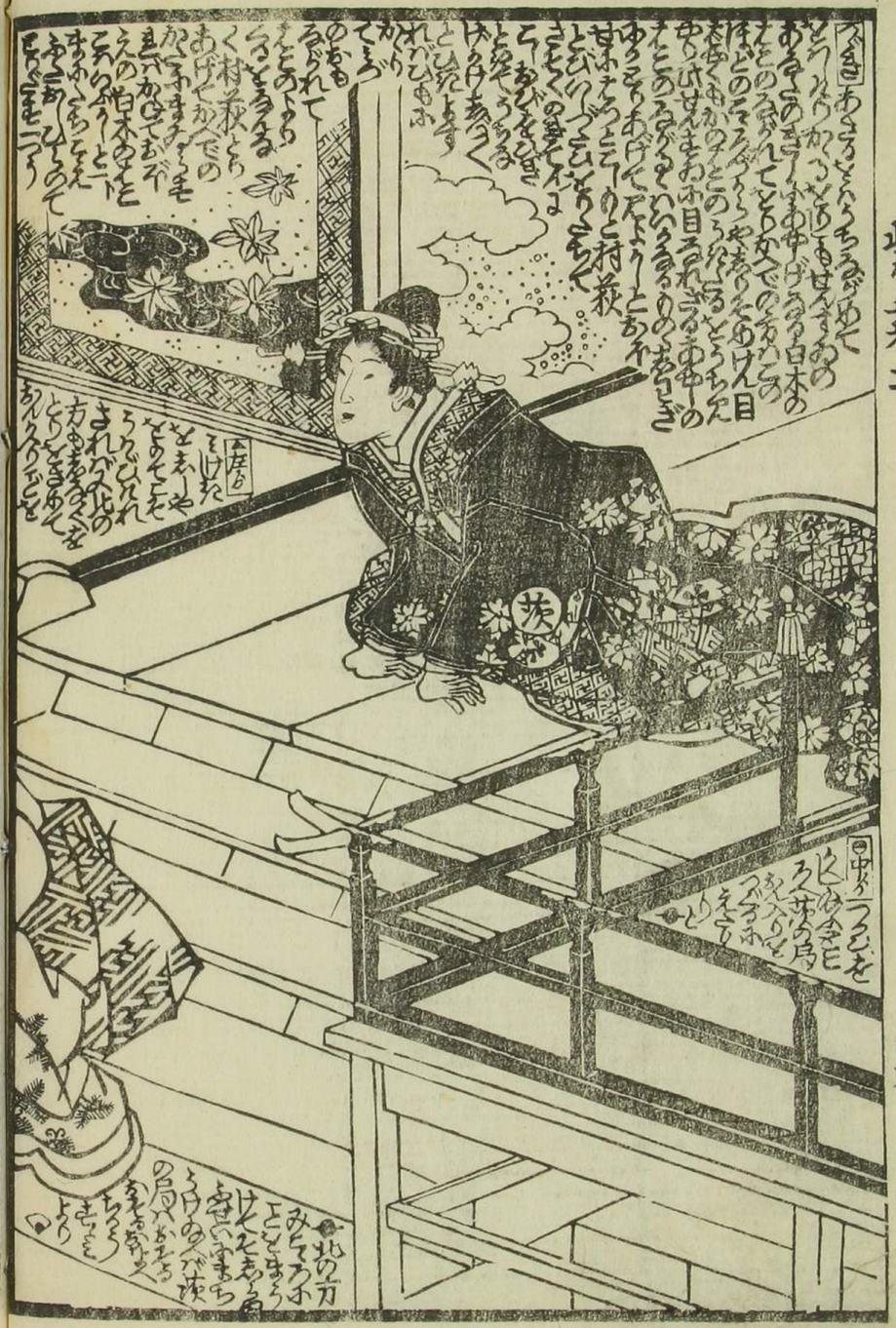

茨

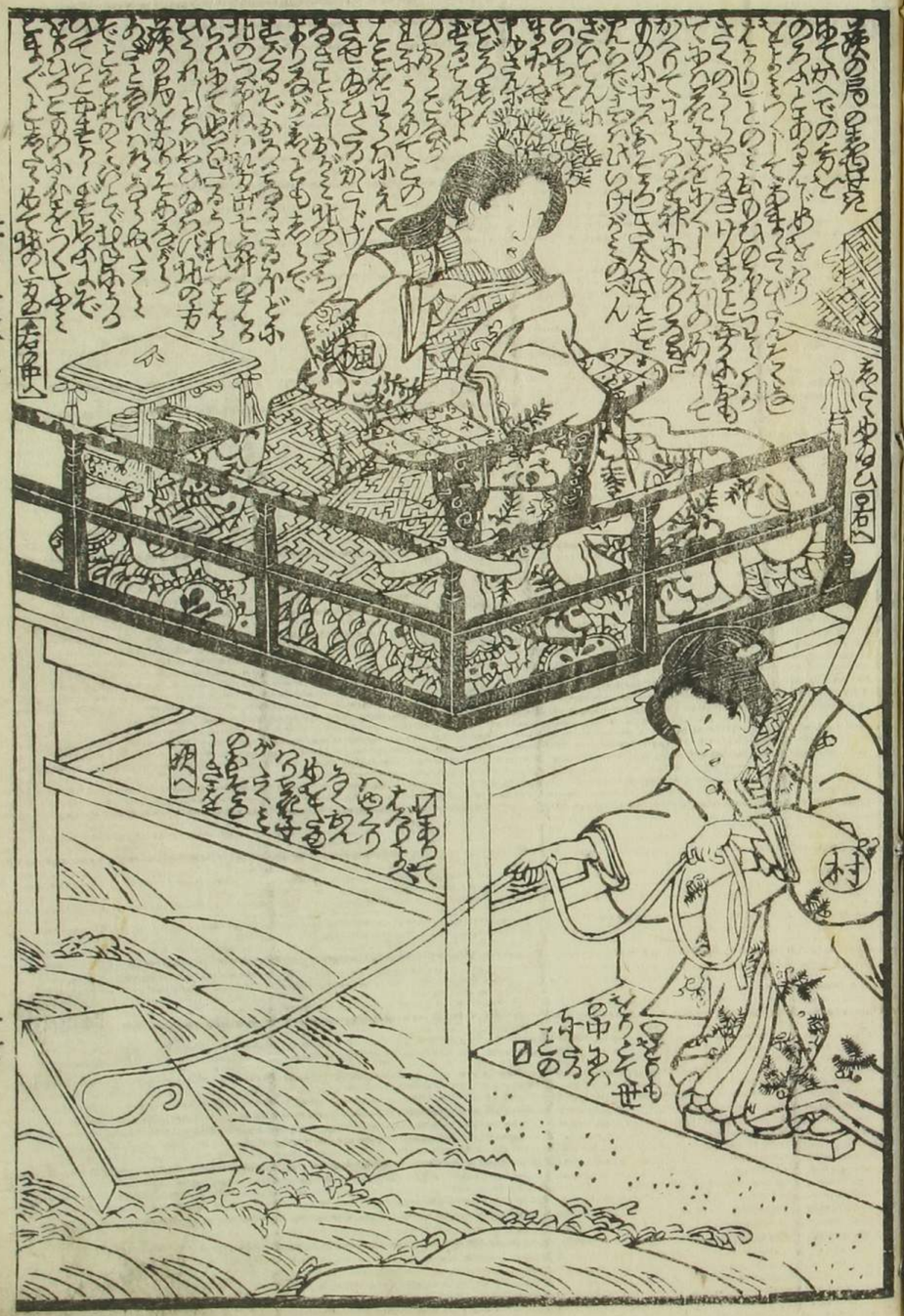
枝

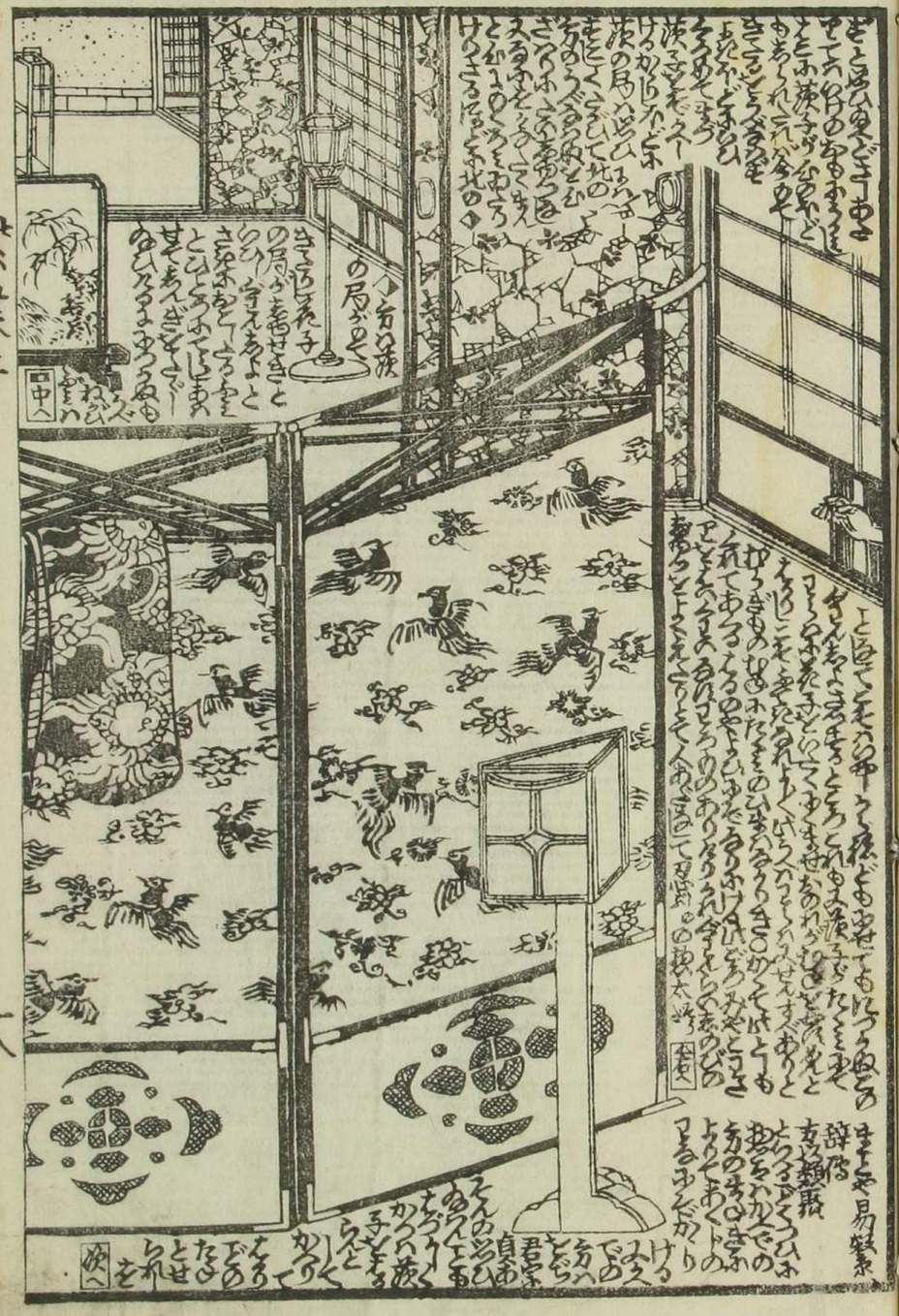


花
七









源氏雲隠の図

[上略] むかしあるところにおいでゆうひかげんの光子の局とせうごんさせたとて源氏ふおおうせんとあまずごのろくべえどんまろとまあーまとをまうけたうりとをそさえとちうやむふたんをのびあくにおひまうろうりけり [その次のとき] 柳ぬま西のひろなりてみおとりをくくるりふれどえんやのさうりふあそまぐるりふ名よりの中むまぞるりふけうこのどころ北のかたよろひやどのれいぐとうぐさゆよとそまぎだんふことあれせ南のまへつかさそれろほとふえ子の局ハ田のめぐとそれぐのちうけとんぼあそびろまおぶおいろうくとぼ

[日中] たのともきれあぐろまつをたうろわけとれずまれねおりあけとれずまれのまそのごまくまそこのつところたうんのごろもコうりさうけばさくれどうまうりさうけばさくれどくんかごこのふくろうとまきあうんかぶるみうきあうれろうんとのあれせとととなうけうくちんうけうちんすまつきともたうつまどふうけそとまあくそのの

ちうふてのうせけふまそれとまろけるみぐふみくもちよろけいごのゆそさうをくられてまうひとあうくうりさまぐふまうりさうけばさくれどうまうりさうけばさくれどくんかごこのふくろうとまきあうんかぶるみうきあうれろうんとのあれせとととなうけうくちんうけうちんすまつきともたうつまどふうけそとまあくそのの

[中] 花 [枝]

[中] 北尾重政画

[中] 月見団子の局ハ

[中] 十九

釋迦八相倭文庫 二編 三編 四編 万亭應賀作 歌川豊國画

小栗一代記 初編 松亭金水作 二編 歌川豊國画

常磐津懐中寄本 小本五冊

富本懐中寄本 小本五冊

奥奉公二編 娘一代成人雙六 万亭應賀作 歌川豊國画

重地本錦繪團扇所 人形町通元大坂町代地 上州屋重藏板

一陽齋後豊國画

宝槌楼 盛之助

梅の花の
白見を
とは
志の人とも
香ふれ
およそ
雪やきえ
ん

作者家傳妙薬

雪の梅 ゆきしの菜。ゆきみん。二日醉 その外子供むし一切の妙薬

誰袖 ふくちう一切の菜泡の名ひ 舟かど奥名の名ひにより

賣弘所 浅草三谷堀 八文字屋

第三編肖像

十返舍後一九作